あ と が き

◆『ティリッヒ研究』第１１号をお届けいたします。 本号も、論文投稿者と編集実務担当者のご協力によって、無事に刊行できたことを感謝いたします。ティリッヒの思想について、多彩なテーマや視点からの論考を収録することができ、小さな研究グループながら、日本におけるティリッヒ研究に一つの成果を加えることができたものと思います。

◆この一年の研究会の活動は、前号「あとがき」でも述べたように、昨年度同様に、ほぼ『ティリッヒ研究』第１１号刊行に向けた研究発表に限定して行われた。それは、これまで研究会を担ってきたメンバーが京都を離れ活躍するようになり、それに伴って毎月１回の研究会を維持することが困難になったためである。この点は数年前から問題化しており、基本的には研究会活動をネット上に移行するという方向性が模索されてきた。しかし、諸般の事情のため、この移行作業が遅れてしまい、当初考えていたあり方――研究会メンバーが、各自のティリッヒに関連した研究成果をＥメールで交換し、質疑応答を経て、研究会のホームページに公開する、といった形態――には移行できずに今日に至っている。今後は、雑誌刊行や学会における共同パネルの企画などを通して研究会の活動を継続させるとともに、研究会の新しいあり方への移行にも取り組んでゆきたい。

◆本号をご覧いただきお気づきと思うが、今回から、雑誌の形式に若干の変更を行った。変更の主な点は、冒頭の共通の文献表ではなく、各論文ごとに、その末尾に文献表を入れる形にしたこと、また論文中における文献引用表記の形式を次のようにしたことである。つまり、引用注は注番号を振らずに本文中の該当箇所に著者名（姓のみ）と刊行年、必要に応じて頁数を明記し、章末の文献一覧に文献名を記載する、という仕方である。引用注は、たとえば、「……。阿部(1989)によると……」、「……と言う（芦名、2004a)。」、「「……。」（阿部、1989、100 頁)」、「……と考える（芦名・土井・辻、2004、121 頁)。」といった形式で、また欧文文献の場合は、「(Tillich, 1951, p.123)」などとなる。

◆この『ティリッヒ研究』が本格的な電子ジャーナルを目指していることはこれまでも説明してきた通りであるが、本号から、印刷製本の部数を最小限に抑え、電子ジャーナルとしての性格をより明確にすることになった。これまで、定期購読いただいてきた方々には、他の贈呈の方々と統一して研究会からの贈呈という形にし、新しい号をお送りしたいと考えている。

◆本研究会の中心メンバーの一人として、また本誌編集実務担当者として活躍されてきた、近藤剛氏が、このたび、京都大学より博士学位（京都大学博士（文学））を取得された。論文題目は、『初期ティリッヒ思想研究』であるが、研究会としても氏の学位取得をお祝いしたい。今後いっそうの研究の飛躍を期待したい。なお、茂洋先生以降、ティリッヒをテーマとした論文を日本の大学に提出し学位を所得した日本人は、藤倉恒雄、岩橋常久、芦名定道、今井尚生、相澤一、石川明人、川桐信彦の諸氏である（国立情報学研究所の学術データベースより)。

◆以上のように、本研究会は、2007 年度も新たな方向性を探りつつ活動を続けてゆく予定であり、関係の皆様にはいっそうのご協力をお願いしたい。

研究会代表 芦名 定道